

# 第7章 戦後復興と平和の願い

## 杉並区平和都市宣言

世界の恒久平和は、

人類共通の願いである。

いま私たちの手にある

平和ゆえの幸せを永遠に希求し、

次の世代に伝えよう。

ここに杉並区は、

核兵器のなくなることを願い、

平和都市を宣言する。

昭和六十三年三月三十日



区立荻窪体育館脇に建つ「オーロラ」の碑  
平成3(1991)年に平和の願いをこめて建てられた  
制作:瀧 徹

## 平和都市宣言と水爆禁止運動

昭和29(1954)年。アメリカの水爆実験に抗議して、多くの杉並区民が署名運動に立ち上がった

そして「原水爆禁止署名運動」は、瞬く間に杉並から全国、世界へ広がっていく

昭和63(1988)年、平和を希求する区民の願いを次世代に引き継ごうと「杉並区平和都市宣言」がなされた

## 最初に魚屋さんが声を上げた

戦後、世界的な広がりを見せた核兵器廃絶運動。その原点ともいえる原水爆禁止署名運動は、杉並区内で始まった「水爆禁止署名運動」がきっかけとなりました。

広島、長崎への原爆投下から間もない、昭和21(1946)年、アメリカはマーシャル諸島で水爆実験を開始します。そして昭和29(1954)年3月1日、ビキニ環礁で実施された水爆実験で、マグロ遠洋漁船の第五福竜丸が放射能を含む「死の灰」を浴びたのをはじめ、近くの海域にいた多数の日本の漁船が被爆しました。当時、マグロや鯨などの遠洋漁業資源は日本国民の貴重なタンパク源でしたが、水爆による魚の放射能汚染を恐れた消費者が買い控えるようになり、漁業者や水産物の流通・小売業者は深刻な打撃を受けます。

4月、区内の魚屋さんたちは、いち早く「杉並区魚商水爆被害対策協議会」を結成し、区議会と区長に陳情請願書を提出。直ちに区議会で水爆実験について討議が開始されました。そんな折、4月16日に杉並区立公民館(以下、公民館)で開催された「婦人参政権行使記念講演会」の会場で、魚商・菅原トミ子さんが水爆後の窮状を強く訴え、その場にいた多くの主婦たちが水爆禁止運動に加わる決意を固めます。

4月17日には、杉並区議会が満場一致で水爆禁止決議を採択。区民の間に水爆禁止を求める世論が一気に高まってきました。そして、全国に先駆けて杉並区で「水爆禁止署名運動」が開始されます。



公民館講座テキスト

### 公民館が署名運動の拠点に

署名運動の拠点となったのは、荻窪三丁目にあった公民館でした。公民館は、昭和28(1953)年に開館した社会教育施設で、当時、たくさんの区民が様々な学習講座や文化活動の場として利用していました。また、初代館長の安井郁(やすいかおる)は、ビキニ環礁実験の国際法違反を国会で証言した国際法学者でもありました。

昭和29(1954)年5月9日、幅広い層の団体や個人が水爆禁止の一点で集まって「水爆禁止署名運動杉並協議会」(以下、杉並協議会)を結成し、安井館長が議長に就任。公民館で学習活動をしていた多くの女性たちが運動に参加し、各戸を訪ねて粘り強く署名を訴えたことで、運動は瞬間に杉並区中に広がります。その結果、開始から2か月にも満たない6月24日の時点で、当時、人口が約39万人だった杉並区において1万人余りの署名が集まるという驚くべき成果が上がりました。

杉並協議会は、この流れを全国に広げていこうと、広島、長崎そしてビキニの痛切な経験に基づき「原水爆禁止署名運動全国協議会」の結成を促し、引き続き安井館長が事務局長を務めました。公民館長室には全国から続々と原水爆禁止を



写真上:杉並区立公民館

写真下:公民館長室で署名簿を整理する婦人たち

める署名簿の束が届き、翌年には広島で第1回原水爆禁止世界大会が開催されるに至ります。昭和30(1955)年11月時点で、集まった署名数は約3,259万人を突破。以来、杉並区は「原水爆禁止署名運動」発信の地として、平和運動の歴史にその名を刻んでいます。

## 平和都市宣言と「オーロラ」の碑

昭和63(1988)年3月30日、区は区議会の議決を経て左記の通り「杉並区平和都市宣言」を行いました。

公民館は、建物の老朽化のために、惜しまれながら平成元(1989)年閉館し、区立社会教育センター(セシオン杉並)に発展的に継承されましたが、核兵器のない平和な社会を望む区民の願いは、平和都市宣言の精神に引き継がれています。

また現在、公民館跡地には区立荻窪体育館が建ち、敷地内に公民館活動を記念するモニュメント(「オーロラ」の碑)が設置されています。この碑は「地球に存在する神秘と美しさが、永遠に続くことを願い、オーロラのもつ自然の素晴らしさを通して宇宙の偉大さを表現した」(杉並区公式HPより)もので、平和への願いをこめて平成3(1991)年に建立されました。原水爆禁止署名運動の発祥の拠点となった公民館の歴史をとどめ、今に伝えています。

出典・参考文献:

杉並区公式情報サイトすぎなみ学倶楽部

(写真提供:安井節子さん)

(再編集:内藤じゅん)

# 平和を願う心を育てる 「アンネのバラ」と高井戸中学校



高井戸中学校の校庭に咲くアンネのバラ

## 校庭に咲く平和のバラ

毎年5月と10月になると、杉並区立高井戸中学校(以下、高井戸中)の校庭いっぱいに、美しいバラが咲き誇ります。平和を願う高井戸中のシンボルとして、大切に育てられているアンネ・フランクのバラです。「アンネのバラ」の愛称で知られるこの花は、第二次世界大戦時、ナチスの迫害を受け強制収容所で命を落としたユダヤ人の少女、アンネ・フランク(註)ゆかりのバラ。昭和51(1976)年にアンネの父、オットー・フランク氏から寄贈されました。

約40年前に遠いスイスから送られてきた3本のバラの苗は、長い歴史の中で、校舎の改築等により栽培が困難になった時期もありましたが、学校、生徒、PTAそして地域の人々の努力で、今では200株近くの見事なバラ園になっています。平成16(2004)年には生徒有志による「アンネのバラ委員会」が結成され、地域の人々で作る協力組織「アンネのバラ・サポーターズ」に援助を受けながら栽培を継承してきました。年2回、満開の時期に一般公開され、地域の宝としても愛されています。

また、平成27(2015)年は、「高井戸中にアンネのバラを植えよう」と、当時の生徒たちが取り組みをスタートしてから40周年の節目にあたり、在校生や関係者たちは、あらためて歴史を振

り返り、バラを育て続ける決意を新たにしました。現在では70名を超える生徒がアンネのバラ委員会に所属し、月に一度、自主的に集まって、PTAや地域の大人たちと一緒に日々の手入れをしています。中には、親子二代にわたってこのバラの活動に関わる生徒もいます。

## バラに託されたアンネの思い

アンネのバラが高井戸中にやって来た頃、杉並区で使われていた中学2年の国語教科書には教材として、『アンネの日記』が掲載されていました。昭和49(1974)年、高井戸中の国語教諭だった小林桂三郎さんは、授業の中で生徒たちにアンネに寄せる手紙を書くように呼びかけ、昭和50(1975)年3月、生徒有志の手で手紙をまとめた文集『暗い炎の後に』が刊行されました。

当時はベトナム戦争が激しく攻防を繰り返していた時代。生徒たちは、自分たちと同世代のアンネに心を寄せ、第二次世界大戦中にナチス・ドイツが行った残虐行為への怒りや、隠れ家の中でも前向きな生き方を貫いたアンネへの共感を手紙に書き記し、平和を守るために自分たちができることは何か、真剣に考えます。生徒たちは話し合いを重ね、文集を英訳してオラ



校庭に再建された立看板

ンダのアンネ・フランク記念財団とオットー氏に送りました。そして小林教諭から「京都にオットー氏から贈られたアンネゆかりのバラがある」という話を聞き、「自分たちの平和の願いのシンボルとして、そのバラを校庭に植えたい」と取り組みを始めます。

生徒たちの願いは、日本で最初にオットー氏からアンネのバラを贈られた京都の牧師・大槻道子さんを通じて伝えられ、生徒たちの純粋な思いに心を打たれたオットー氏は、昭和51(1976)年3月、スイスから高井戸中に向けてバラを送ってくれました。厳しい植物検疫を経て空輸されたバラの苗は、いったん立川市にある都立農業試験場に運ばれて技師の協力で無事に根付き、3か月後の6月12日に高井戸中の校庭に植えられます。偶然にも、その日はアンネの誕生日でした。

以来、アンネのバラは高井戸中から区内や全国の学校に寄贈され、平和のシンボルとして各地で咲いています。平成18(2006)年には、区立読書の森公園にも植樹されました。

### 平和を生み出す人になりたい

平成26(2014)年2月、都内の図書館で『アンネの日記』をはじめ関連図書が破られるという事件が起き、杉並区は自治体として最も多くの被害を受けました。事件後、あらためて、「平和都市・杉並」のシンボルでもあるアンネのバラを大切にしよう、区立中央図書館にアンネのバラの花壇が作られました。

平成27(2015)年5月16日、「アンネのバラ取り組み40周年」を記念して式典が行われ、最初の3本の苗が植えられていた当時、バラの傍らに立てられていた看板のレプリカが校庭に再建されました。看板には、次のように書かれています。

「暗い戦争の炎の中に死んだアンネ・フランクの魂のためにヨーロッパの園芸家が薔薇をつくり、アンネの父、オットー氏に贈った。それが多くの人々の善意により、この遠い日本の地

に根付く。この世の人々が手をつなぎ合って、永遠に幸せを守り続けられるようにと、心からの願いをこめて、この薔薇を育てていこう。私たちは決してこの薔薇を枯らしてはならない。1977. 4. 8 アンネ・フランクに寄せる手紙編集委員会」

現在、アンネのバラ委員を務める2年生の女子生徒は、立看板を前にこう語ってくれました。「オットーさんが生前『あなたたちはアンネの悲劇に同情するだけでなく、平和を生み出すために何かをする人になって下さい』と語っていたと聞き、私も、そういう人になりたい、と思いました。決してこのバラを枯らさず、後輩たちにバトンタッチしていきたい」。また校内では生徒会が中心になり、「バラを大切に作る心で、他者を思いやっけていこう」と、いじめをなくす活動にも力を入れています。平和と人権尊重の実現を願いながら命を落としたアンネ・フランクの精神はバラに託されて、戦後70年の時を経た今も、高井戸中の生徒たちに受け継がれています。



地元商店街に掲げられたバラ公開日の看板



地元商店街の夏祭りで配布したアンネのバラの折り紙

註 アンネ・フランク(1929-45)

ドイツ・フランクフルト市で生まれたドイツ系ユダヤ人家庭の二女。第二次世界大戦中にナチスの迫害から逃れてオランダで隠れ家生活を送ったが、昭和19(1944)年に密告によりナチスに連行され、その翌年、ベルゲン＝ベルゼンの強制収容所でチフスのため亡くなった。昭和17(1942)年6月12日から昭和19(1944)年8月1日まで綴られた『アンネの日記』は、戦後、父オットー・フランク(1889-1980)により出版され、世界各国でベストセラーになり、平成21(2009)年にはユネスコの世界記憶遺産にも登録された。日本でも昭和27(1952)年に文藝春秋新社から最初の翻訳版が紹介されて以来、人々に読み継がれている。

出典・参考文献:

杉並区公式情報サイトすぎなみ学倶楽部

(再編集:内藤じゅん)

「アンネのバラ」は、荻窪・読書の森公園にも株分けされています



## 戦争を伝え平和を願う学習 被爆体験者の伝える活動



和田小学校の廊下に掲示される被爆資料

「戦争は絶対にやっちゃいけない」。子どもたちにただただその思いを伝えたいと、杉並に住む原爆被爆者の方々は、自らの体験談を語り継ぐと小学校などを訪れます。

### 杉並光友会の結成

広島と長崎に原子爆弾が投下されてから70年。その原爆被爆者が杉並区にも住んでいます。「杉並光友会」は、杉並区在住の広島と長崎の原爆被爆者の団体として、昭和33(1958)年2月に発足。都内の団体としては品川に次いで2番目に早い発足で、同年11月には都内全体の団体である「東友会」が結成されました。

杉並区は、第五福竜丸の被災を契機に始まった原水爆禁止運動の発祥の地であり、平和活動を盛んに行ってきた歴史があります。昭和63(1988)年には、杉並光友会が中心となって約10万人の署名を集めて呼びかけた、「杉並区平和都市宣言」が行われました。「杉並が東京の平和活動のリーダー役としてやっていかないといけないという使命感をもってやっています」と、原田英俊会長。平成30(2018)年に迎える結成60周年に向けて、積極的に活動を行っています。

平成18(2006)年から続けている「被爆者と区民の交流セミナー」は、平成28(2016)年2月で26回目を迎えます。著名人の講演と会員の被爆体験談で構成されるこのセミナーには、親子づれから留学生、年配の方まで、平均して100名、延べ2,600名以上の方が参加しています。また、毎年8月には区役所のロビーで原爆展を行っており、来所する多くの方が原爆に触れる機会になっています。

平成23(2011)年から増えてきたのが、小中学校での被爆体験談の出前授業です。特に被爆70年の今年は数多くの学校から授業の希望がありました。そんな学校のひとつ、和田小学校での授業風景をご紹介します。

### 子どもたちに語り継ぐ

——小日向テイ子さんの体験談

和田小学校は、昭和20(1945)年5月25日の空襲で校舎が全焼した歴史があります。多くの児童は長野県に集団疎開をしていましたが、学校周辺でも多くの犠牲者が出ました。学校の昇降口には、子どもたちの目につくところに当時の資料が置かれています。今回、杉並光友会が出前授業を行ったのは6年生

の約90人。授業ではすでに習った原爆と戦争ですが、被爆者の生の声を聞くという体験に開始前はどこかそわそわした様子でしたが、話が始めると、一生懸命メモをとったり、じっと見つめたり、被爆者の語りに引き込まれていきます。

当時、山口県の日赤病院の看護学生だった小日向テ子さんは、被爆当時15歳、現在は85歳です。原爆投下の2日後に救護班として広島に入りました。小日向さんは声を震わせながら話します。

「いまこそお国のためになれると出発しましたが、私の親は『娘はもう生きて帰れんかもしれん』と思ったそうです。あまりにも悲惨な状況に、こんなに大勢の命を預かるのかと体が硬直しました。ヨードチンキに耐えるうめき声、背中に刺さったままのガラス、目に入ったウジ虫…。病院での夜の見回りでは、自分の舌を噛みながら『天皇陛下万歳』と繰り返す人もいました…」

当時の様子を思い出すように、つらそうな表情を浮かべながら話されるひと言ひと言に、子どもたちは静かに聞き入っていました。

### ひとりひとりの被爆体験

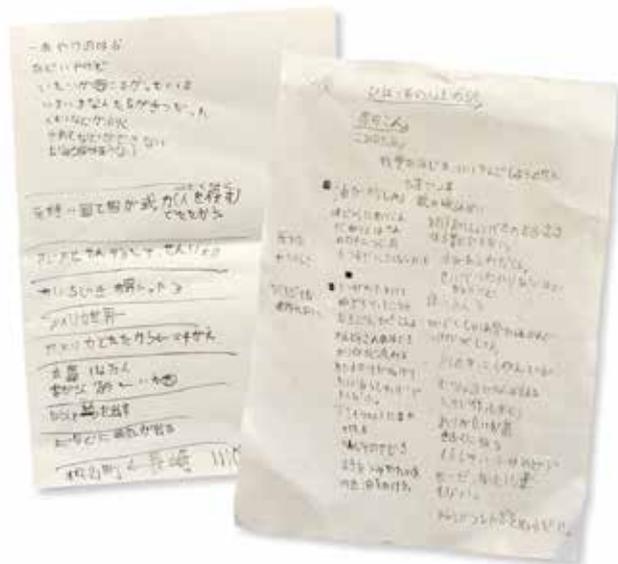
もうひとりの登壇者は原田会長です。長崎で被爆した原田さんは、原爆の爆発した高さをスカイツリーとして、その威力を子どもたちに伝えました。「ひとりでも多くの人を殺そうとするのが戦争です。勝っても負けても人が死ぬ」と、戦争の悲惨さを力強く伝えます。子どもたちのメモには「うじむし」や「スカイツリー」の文字が並びます。

祖父母と暮らしている子どもは1クラスでも2、3人くらいのもので、「うじむし」が何のことか分からないという子もいました。聞き慣れない言葉や身近なたとえを、子どもたちも受け止めようとした様子がメモに表れていました。

「語りにかかる思いはひとりひとり違います。私自身は、やっぱり戦争はやっちゃいけないという、それだけです。それを子どもたちにいかに語り継いで、大きくなったら戦争をしないような国になるように託したい」と原田さん。小日向さんは、実際に自分が痛い思いをしていないものの、人の苦しみを目の当たりにした様子がいまでも思い出され、自分の原稿を読んでも涙が出てくると言います。

### 次の時代を生きる人々に届ける

杉並光友会では、結成40年や被爆60年などの節目に、被爆



写真上:生徒のメモ 写真下:授業の様子

証言集を発行してきました。被爆70年の記念としても、『原爆体験を語り継ぐ』と題して50名ほどの証言を集めた冊子を発行します。345人の会員の中には、33年もの長い間活動されている方や、90歳になっても「ピースフォーラム」の団体代表を務める方もいます。学校への出前授業や定期的なセミナーの実施は都内では珍しく、被爆者の高齢化とともに閉会するところも出てきてます。

「いまは結成60周年に向けてみんなで頑張ろうとやっています。その先もできれば続けていきたい」と、「使命感」を強く持っている原田さんをはじめとする会員の皆さん。平均年齢が80歳となった今日も、少しでも多くの人々に生きた声を届けようと、被爆体験を語り続けています。

(平成27年10月 取材:廣畑七恵)

# 杉並の文化人と戦争

戦前より、杉並には多くの文化人が暮らしていた。  
戦地へゆくもの、空襲を受けたもの。  
戦時中、彼らは何を見、何を思ったのか。

## 徴用で南方へ向かった 阿佐ヶ谷文士

昭和4(1929)年頃より、阿佐谷、荻窪周辺に住む文士たちによって始められた「阿佐ヶ谷会」。当初は酒と将棋の対局が目的だったが、次第に大きな会に発展。井伏鱒二を中心に30名ほどの文士たちが集った。彼らはどんな戦争体験をしたのだろうか。荻窪での生活が綴られた井伏の自伝的作品である本書に、当時の文士たちの様子が書かれている。

「戦争直前に陸軍徴用令を受けたのは、私のほかに小田嶽夫と太宰治、中村地平の四人であった。但し、太宰は本郷区役所で検査のとき、肉体の異常を申し出て胸部疾患のため徴用即日解除を言い渡された。」

昭和16(1941)年12月2日、井伏らを乗せた輸送船は大阪から南方へ向けて出航。船中で開戦を知る。文士たちの日課は、「南航ニュース」という船中新聞の発行だったという。その後、井伏はシンガポールに入り、軍司令部が接收した新聞社の運営や昭南日本学園で日本歴史を教えるなどし、1年後に帰還する。

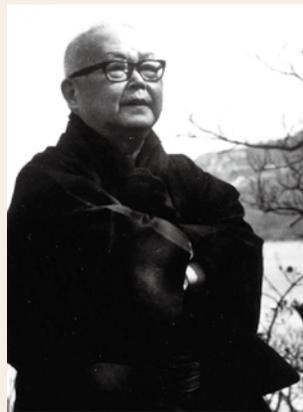
戦局も激しくなった昭和18(1943)年頃から、文士たちも各地へ疎開をはじめ。阿佐ヶ谷界限に残った文士たちは青柳瑞穂、上林暁、外村繁の3人。上林と外村は荻窪署管内の警防団員として活動、青柳が自宅を離れなかったのは好きな骨董を鑑賞するためだったともいう。

昭和20(1945)年7月、甲府にいた井伏は空襲を受けて故郷の広島へ疎開し、終戦を迎える。2年後、荻窪に戻ってきたときの様子を次のように書いている。

「久しぶりで荻窪駅に下車したわけだ。駅前の商店は殆どみんな戸を明けていても、休業したようにしているのが大半で、店を明けている果物屋も明るい色の商品は置いていなかった。林檎やレモンなど一つもない。」

「阿佐ヶ谷会」は戦時中も残った者で細々と続けられており、戦後、疎開先から文士たちが戻ってくると、再び集まるようになる。やがて文士たちの仕事が忙しくなると会も少なくなり、昭和47(1972)年が最後となった。

### 『荻窪風土記』井伏鱒二 (新潮文庫)



写真提供:ふくやま文学館



#### <プロフィール>

井伏鱒二 いぶせますじ

明治31(1898)年、広島県出身。大正6(1917)年、早稲田大学入学。昭和2(1927)年より荻窪で暮らす。昭和4(1929)年「山椒魚」を発表。『本日休診』『黒い雨』など多くの作品を残す。

#### 参考文献:

『文壇資料 阿佐ヶ谷界限』 村上護 著  
『杉並文学館—井伏鱒二と阿佐ヶ谷文士—』